動詞「フサグ」と「フタグ」の用法と文体について

胡　鴻　洋

はじめに

平安時代の文献に和文脈と漢文脈とが併存・混淆する現象は春日（一九三六）によって実証的に論じられた。この研究を受けて、「ゴトシ―ようなり」、「シム―す・さす」のような同じ意味の表現に、異なる語を用いていることを手がかりにして和漢混淆文である『今昔物語集』での使い分けの様相を明らかにしようとする堀田（一九四一）、山田（一九四一）等を始めとする研究が相次いで現われた。「す・さす」と「シム」のように、文体によって二形が対立的に用いられる語について、築島（一九六三）は、和文脈の典型である和文と漢文脈を代表する漢文訓読文に顕著に見られる語であり、「表現対象が一応同じである語」「略々同意味の語」「同じ意味の語」として、他にも多くの品詞から例を提案している。①

このような二形対立の指摘に対し、関（一九九三）は「イキドホル―むつかる」など、内田（二〇〇五）は「アラカジメ―かねて」を挙げて、両語の意味が狭い意味で同義でないものを二形対立と認めない立場に立っている。いっぽう、築島説を積極的に認める研究も多く見られる。例えば、峰岸（一九八六）は二形対立とされる語の指摘に基づき、和文語、漢文訓読語、記録語という「三形対立」語の概念を提出した。大川（二〇一七）は二形対立とされる語を文体指標として、コーパスのデータをもとに平安鎌倉時代の文学作品の文体を五つに分けて、平安鎌倉時代の文学作品全体の中で個別作品がどのように文体的に位置付けられるかを論じた。②

ただし、二形対立とされる語のうちに、漢文訓読語とされる語は和文に見えないが、それに対立するとされる和文語は訓点資料に現れる場合がある。これについて、築島（二〇〇一）は訓法の歴史的

変遷や祖点の問題等に関連すると推測しながら、今後、個々の語について柔軟に実態を分析していく態度が求められようと述べている。月本（二〇〇一）にも従来の通念にとらわれない、より実態に即した研究や検討が必要であるという指摘が見られる。③また、山本（二〇一九）は、和漢混交文に併存する二形対立語が意味分担する原因を追究するために、個別に二形対立語の語史を丹念に記述する必要があるとする。これらを踏まえると、二形対立とされる語の性質を一元的に捉えず、個別に実態を捉えていく必要があるであろう。

本稿では、築島が提案した二形対立語から、和文に見られない漢文訓読語「フサグ」と、訓点資料に少数ではあるが、見られる和文語「フタグ」を取り上げ、それぞれの性質を分析し、和文語が訓点資料に見える現象の内実を再検討する。訓点資料に見出される「フタグ」の例について、築島（一九六三）は平安初期に用いられた古訓の和文的性質によるもので、訓点資料に用いられていても訓点（特有）語ではないとしている。ただ、築島はさらに調査を進めるべき旨も述べており、「フタグ」を和文語に分類しながらもその処置の妥当性についてはなお慎重な姿勢を見せている。「フサグ」と「フタグ」の意味差に関する研究として関（一九九三）が挙げられる。関は『宇治拾遺物語』に見える「フタグ」が「蓋をする」ことを表す具体動作語、「フサグ」が「蓋をする」ことを表す比喩動作語としている。しかし、『宇治拾遺物語』にある「フサグ」「フタグ」の用例数は複合動詞を含めて僅か4例で、仮名書き例は「フサグ」1例のみであり、両語の性質の検討は必ずしも十分と言えない。

本稿では、漢文訓読文、平安和文、和漢混淆文における「フサグ」と「フタグ」との意味用法を分析し、平安時代における両語の二形対立の内実を検討し、さらに鎌倉時代に入り、それぞれの意味用法がどのように変遷したかを明らかにする。

一　漢文訓読文の「フサグ」の意味用法

本節では、漢文訓読文の「フサグ」がどのような意味で用いられたかを確認する。漢文訓読文の「フサグ」の意味は私に分類すると、その目的語と文脈により、【表1】に示す通り、A〈何かで穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉、B〈モノ・ヒトを食い止める〉、C〈心をいっぱいにする〉の三つに分けられる。以下、「フサグ」の例を挙げる。

A〈何かで穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉の意

Aの意に解される「フサグ」が加点した漢字としては「塞」15例、

【表１】漢文訓読文における「フサグ」の意味

加点年			資料名＼意味・目的語	A							B								C		不明	計
				穴	道	口	鼻	耳	目	門・扉	水	箭	五輪	兆し	心	偏見	声	人	責任	気持ち	生殖器官	
中国	内典	810	小川本願経四分律乙巻	1(塞)																		42
		830	西大寺本金光明最勝王経							1(閉)												
		850	松田福一郎本四分律行事鈔巻上															1(壅)				
		950	興聖寺本大唐西域記巻第一二							1(塞)									1(塞)			
		1002	石山寺本法華経義疏		1(壅)									3(杜杜塞)						1(塞)		
		1016	天理図書館・京都国立博物館本南海寄帰内法伝巻一～四	1(塞)							1(偃)							1(防)				
		1046	曼殊院本金剛頂経観自在王如来修行法							1(閼)												
		1050	東大寺図書館本法華文句	1(塞)	1(塞)					2(開開)												
		1078	西大寺本大毘盧遮那経										1(距)									
		1099	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝巻七・九			1(杜)					1(塞)								1(塞)			
		1100	興福寺本高僧伝巻第一三			1(杜)																
		1105	前田本冥報記							1(閼)												
		1114	東京大学国語研究室本大毘盧遮那成仏経疏巻第九									1(捍)										
		1180	東京大学国語研究室本大乗本生心地観経巻第八						1(冥)													
		1126	国立国会図書館本大慈恩寺三蔵法師伝巻第七													1(挫)						
		1128	法隆寺本南海寄帰内法伝巻第一・三	1(塞)	2(塞杜)																	
		1150	正智院本佛頂尊勝陀羅尼経							1(閼)												
		1330	穂久邇文庫本五行大義								1(塞)											
	外典	1113	神田本白氏文集巻第三・四					1(塞)							1(防)							
		1185	高山寺本論語清原本					1(塞)														
		1211	高山寺本史記周本紀			2(鄣壅)																
		1303	高山寺本論語中原本					1(塞)														
		1250	高山寺本荘子甲，乙巻	2(塞壅)		1(閉)					1(堙)											
日本		1100	最明寺本往生要集			1(唵)																11
		1100	高山寺本三教指帰巻中								1(塞)											
		1111	高山寺本秘密曼荼羅十住心論																		1(閹)	
		1134	大谷大学本三教指帰注集四帖		1(壅)																	
		1150	前田本日本書紀巻第一一								1(塞)											
		1155	天理図書館本三教指帰一帖				1(塞)															
		1200	金剛寺本医心方巻第一三	1(塞)																		
		1250	観智院本世俗諺文						1(瞑)													
		1250	観智院本作文大躰														1(礙)					
		1250	古典保存会本文鏡秘府論地巻		1(塞)																	
		1286	天理図書館本大般若経音義		1(塞)																	
計				7	7	6	1	3	2	7	6	1	1	3	1	1	1	2	2	1	1	53
				33							16								3		1	

注：A：何かで穴や通路などを満たして閉ざす，特に，部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす。B：モノ・ヒトを食い止める。C：心をいっぱいにする。

「壅」4例、「杜」3例、「閉、闔、開」各2例、「關、鄣、掩、冥、瞑」各1例である。このうちの「塞」は、例が最も多く見られ、慧琳撰『一切経音義』「隄塞」の条に「下　僧則反、俗字也。説文正𡨦、従レ𡨦。考声、窒也、満也、当也、鄭注論語云　塞猶蔽也。説文云　隔也」、高誘注『淮南子』に「塞、閉也」、高誘注『呂氏春秋』に「塞、遏也」とあり、主として「満たす」「覆う」「閉ざす」「防ぐ」の四つの意味が認められる。「フサグ」のAの意味はこのうちの「満たす」「（目や扉などを）閉ざす」に当たるものである。（「防ぐ」意は後出のBの意味に対応する）。訓読された字のうちでは、「杜、閉、闔、開、關、鄣、冥、瞑」は「閉ざす」の意、「掩」は「口に食べ物を（いっぱい）満たして（閉ざす）」の意、「壅」は枠に押し込め閉ざす意である。

「フサグ」は「穴」「道」「口」「耳」「門」「目」など具体名詞を目的語とし、基本的に穴や通路を満たして閉ざす意味を表すが、部屋の通路である扉、視線の通路である目蓋を閉ざすことを表す例も含める。例は以下のようなものである。

1牛角山の巌に大石室有（り）…近、崖崩レテ門の径（道）を掩（オホ）ヒ塞（フサ）ケリ…故を以て今に至（ル）も石の門開（か）不。

（興聖寺本大唐西域記巻一二平安中期点）

例1は門の出入り口は崩れた崖の石で満たされ、閉ざされて、完全に通行できないことを表す。

いっぽう、次の例は、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざすことを表す。

2仏房ヲ開（フサ）キ地ヲ掃ハ（令（シム））南ヲ開（フサ）ケ北（ハ）ハ開キヌ。此ヲ掃ヘハ彼ハ汚レヌ。

（東大寺図書館本法華文句平安後期点）

3在阿蘭若及空寂室。端身正念結前如來金剛縛印　冥（フサイテ）目観察臆中明月。作是思惟。

（東京大学国語研究室本大乗本生心地観経巻八治承四年点）

例2は仏房の扉を閉ざし、汚れが仏房に入る通路を閉じることを表す。例3は目蓋を閉ざし、心の中にある明月を瞑想して観察する意味であり、視線の通路を閉じることを表す。

B〈モノ・ヒトを食い止める〉の意

Bの意に理解される「フサグ」に宛てられた漢字は「塞」5例、「杜」「防」各2例、「壅、偃、距、捍、挫、堙、礙」各1例である。これらの訓読された「壅、偃、距、捍、挫、堙、礙」は、「防ぐ」意味を持つ。「フサグ」は「水」「人」「心」「兆し」などを表す語を目的語とし、〈モノ・ヒトを食い止める〉ことを表す。

4智慧手在心。如執蓮華像。直申奢摩他臂。五輪上舒。而外向距（フサグ）之。是無能勝印。

（西大寺本大毘盧遮那成佛経承暦二年点）

5（筆者注：摂衣界の）意は女の浄人の厨内に來入するを防カムとには非（す）。

（天理大学図書館南海寄帰内法伝巻二平安後期点）

例4、5はそれぞれモノ（地・水・火・風・空という五輪）、ヒト（女）を食い止める例である。

C〈心をいっぱいにする〉の意

Cの意と見られる「フサグ」はすべて「塞」に宛てられている。これは、心を容器のようなものと捉えて、内部空間を満たす、埋める意味を担う比喩的用法である。

6身意泰然快得安隠者、憂悔心を塞ゲ、所以（に）泰に（あら）不。

（石山寺本法華経義疏長保四年点）

7此ノ身心ヲ罄シテ以テ貲キ不（ル）［之］恩ヲ答へ、少窮無キ［之］責ヲ塞カム。

（興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点）

例6、7は、「憂悔心」「責」のような抽象名詞を目的語とし、ある感情で心をいっぱいにすることを表す。

以上述べたように、漢文訓読文の「フサグ」はA〈何かで穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉、B〈モノ・ヒトを食い止める〉、C〈心をいっぱいにする〉の意のいずれかに理解される。

二　漢文訓読文と和文の「フタグ」の意味用法

本節では、漢文訓読文、和文の「フタグ」はそれぞれどのような意味で用いられたかを確認する。

【表2】【表3】に示すように、漢文訓読文、和文の「フタグ」のうち、〈あるものを何かで覆って遮る〉の意に解される例は29例、〈占める〉の意に解される例は1例である。以下、具体例を挙げる。④

a〈あるものを何かで覆って遮る〉の意

aの意に解される「フタグ」の目的語は「目」「面」「穴」「井」「耳」などがある。

8勧君掩（オホハシムトモ　又　フタカシムトモ）鼻君莫掩、使君夫婦為参商。

（神田本白氏文集巻四天永四年・三二八行）

9天皇畏て蔽（メラヲオホヒ）目を（給）不見（シ給）却入殿（オホトノ）中に使（給）放於岳。

（図書寮本日本書紀巻一四永治二年点）

10夫君天下以治萬民者、蓋（ウタキオホフコト）之如天。

（前田本日本書紀巻一一院政期点）

例10の「蓋」は「ウタキオホフコト」が施されているが、その文

【表２】漢文訓読文における「フタグ」の意味

資料名				a あるものを何かで覆って遮る								不明	計
				人	鼻	面	目	口	穴	器物	法	門	
中国	内典	810	小川本願経四分律						1（塞）				1
中国	内典	810	聖語蔵本願経四分律古点							1（蓋）			1
中国	内典	1065	東寺本金剛頂瑜伽中略出念誦経巻第四				1（抹）						1
中国	内典	1163	石山寺本大唐西域記巻第八					1（杜）					1
中国	内典	1214	醍醐寺本大唐西域記巻一二								1（閟）		1
中国	内典	1362	東寺本大威力烏樞瑟摩明王経						1（塞）				1
中国	外典	1113	神田本白氏文集巻第四		1（掩）								1
日本		830	東大寺諷誦文稿			1（掩）						1（塞）	2
日本		1142	図書寮本日本書紀巻第一四	1（閟）			1（蔽）						2
計				1	1	1	2	1	2	1	1	1	11

【表３】和文における「フタグ」の意味

		a										b	計
		面・顔	透影	姿	道	穴	井	目	口	耳	韻	寝殿	
竹取物語	会												1
	地	1											
落窪物語	会												1
	地				1								
宇津保物語	会							1	1				2
	地												
枕草子	会									1			5
	地	3							1				
源氏物語	会												6
	地	1			1	1				1	1	1	
浜松中納言物語	会					1							1
	地												
栄花物語	会							1					2
	地						1						
大鏡	会		1	1									2
	地												
計		5	1	1	2	2	1	2	2	2	1	1	20

a：あるものを何かで覆って遮る。b：占める。

脈を合わせて考えると、「フタキオホフコト」の誤記と推測される。例8の「掩」、例9の「蔽」、例10の「蓋」字はいずれも「覆って隠す」意味にしか解せず、「フタグ」「オホフ」は意味に重なりのある類義語と言えよう。

11（引用者注：韻字を）ふたぎもてゆくままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどのまどふ所どころを、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。
（源氏物語・賢木）

12（宮）「いみじう、かたはらいたき事はせさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と仰せらるれば…　（会）（枕草子・八三段）

13車の人々騒ぎ立ちあゆめば、道をふたぎてさらにやらねば、はしたなくて、しばしかい群れて立ちたるを見て…
（落窪物語・巻之二）

例11は古人の詩の韻字を何かで覆って隠しておいて、それが何であるかを当てる遊戯を言っている。例12は尼と清少納言との談話を聞かないように、中宮が何かで耳を覆ったことを表す。例13は、中納言一行は清水詣でへの道が、中将一行によって道を遮られて、前に進むことができなかったことを表す。

例14、15は具体物でなく、何かの作用・意図などによって、口や目の機能を遮って「言わない」「見ない」ことを比喩的に述べたと解される例である。

14（俊蔭娘）「れいの事よ。さりとてやまひしたる事はりなれば、くちふたげ」とて、たき物などよくせさせ給てやりたてまつらせ給。　（会）（宇津保物語・楼の上）

15（妍子）「あやしのことや。桟敷を造り色めかせたまはゝこそは人の　誹もあらめ、御前より渡らせたまはんを、御目をふたがせたまふべきことかは」（会）（栄花物語・巻第一三）

例14は右大臣と俊蔭娘の会話の場面で、俊蔭娘はその場で右大臣に対して、左大臣を批判する話をやめさせる文脈である。「フタグ」の目的語は「口」であるが、左大臣を批判する言葉の通路とも理解される。すなわち、俊蔭娘の命令で左大臣を批判する言葉の通路はその場で遮られ黙ったという意味と理解できる。例15は賀茂行幸の見物をするかを迷う中宮の妍子の会話であり、目蓋を物理的に閉ざすのではなく、賀茂行幸を意識的に見ないことを意味している。

b〈占める〉の意

bの意に解される「フタグ」は「寝殿」を目的語とする和文の1例のみ見られる。

16寝殿はふたげたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして…

（源氏物語・松風）

例16は、新築された東の院の寝殿は光源氏の御休憩所とするところであり、誰にも占めさせなかった（移り住ませなかった）という意である。

以上、漢文訓読文と和文の「フタグ」の意味用法を検討した。「フタグ」は「目」「口」「耳」「穴」「道」を目的語とする点で共通するが、〈何かで穴などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉〈モノ・ヒトを食い止める〉〈心をいっぱいにする〉という「フサグ」の意と異なり、〈あるものを何かで覆って遮る〉〈占める〉の意のいずれかに解される。

三　同一漢文訓読文における「フサグ（フサガル）」「フタグ」

第一、二節では、漢文訓読文の「フサグ」、漢文訓読文と平安和文の「フタグ」の意味用法が異なることを確認した。本節では小川本（聖語蔵旧蔵）『四分律』、神田本『白氏文集』、図書寮本『日本書紀』を取り上げ、同一の漢文訓読文の資料に付された「フサグ（フサガル）」「フタグ」の訓読例を取り上げ、別の意味に解されるか否かを確認する。

まず、小川本（聖語蔵旧蔵）・聖語蔵本『四分律』における「フサグ」「フタグ」の意味用法を確認する。

17「虱若出（で）ば、蓋（フタ）を作（リ）て塞（フタ）グ（フサグ）応し。」彼宝を（もち）て塞（に）作ル。仏言（はく）、「宝を用（ゐ）て作（る）応（からず）[不]。牙骨乃至木を用（ゐ）て作（る）応し。　（小川本（聖語蔵旧蔵）四分律乙巻平安初期点）

18或蓋（フタキヨサム）三藏器物。　（聖語蔵本願経四分律古点平安初期点）

例17の小川本（聖語蔵旧蔵）『四分律』、例18の大矢が紹介した聖語蔵本『願経四分律古点』に加え、春日が紹介した斯道文庫本『四分律』もあり、この三つの資料はいずれも八一〇～八二五年に加点されたと推定されている。[5] 例17について、大坪の解説によれば、乙巻2枚目21行以降が甲点白点で、その前が別種の点である。これに従って考えると、16枚目5行目にある、「塞」に付される「フサグ」「フタグ」はいずれも甲点白点となり、同じ時期に加点されたものと推測される。「虱若出（で）は、蓋（フタ）を作（リ）て塞（フタ）グ応し。彼宝を（もち）て塞（に）作ル。」という文脈から、「蓋」と「塞」はともに虱が筒から出ないようにする物と解される。「塞」は「蓋（フタ）を作（リ）て」という文脈を上接し、最初、主訓「フタグ」で訓読された。それに応じて、「彼宝を（もち）て塞（に）作ル。」という文脈が続く。いっぽう、「塞」に「フサグ」の別訓があるのは、後続箇所に「木」「骨」とあるように、虱の出るのを防ぐ役割に重きを置

いた訓ではなかろうか。名詞「塞」（去声代韻）は『広韻』に「千代切、辺塞」、『和名類聚抄』（巻一ノ一一）に「塞　正作レ窒、顧野王案険悪之処、所三以隔二内外一也。先代反。和名古曽」とあるように、内と外を隔てて防ぐ意味があるために、この意味において「フサグ」の訓が付されたと推測できよう。例17の「フタグ」は筒を蓋で覆って遮ること（「塞」に「覆う」意味があることは第一節を参照）、「フサグ」は筒の口を蓋で満たして閉じることの両義に解されるのである。18の例では、器などを蓋で覆って隠すという意味に解釈されるため、「フタグ」の訓が付されたと解される。

次に神田本『白氏文集』にある「フサグ」「フタグ」の意味用法が同じであるかを確認する。

19天可レ度、地可レ量、唯人之心不レ可レ防（フサク）。

（神田本白氏文集巻四天永四年点・三二一七行）

20勧君掩（シムル）鼻君莫掩、使君夫婦為参商。

（神田本白氏文集巻四天永四年点・三二一八行）

神田本『白氏文集』巻四の巻尾に「天永四年三月二十八日点了／藤原茂明」とあり、右の2例は同じ日に加点された。そのなかで、例20の「掩」に「オホハシムトモ又フタカシムトモ」と訓が二つ施されていることが注目される。小林（一九六七）は、神田本『白氏文集』の一漢字に対して、多く三訓、又は二訓以下を、並べ挙げて、訓法の諸異説を示し、その上で採るべき訓を合点によって明示してあると指摘しているが、「オホハシムトモ」「フタカシムトモ」はいずれにも合点が付されないから、加点者は両方とも適切な訓としていると考えられる。例19の「フサグ」は巻四の三二七行目、例20の「フタグ」は巻四の三二八行目にあり、隣接する行にある「フサグ」「フタグ」が同じ日に墨点で施されていることは、加点者は両語の意味用法が異なっていることを意識しながら用いたと推測される。例19は「人の（悪い）心を食い止めることができない」のを意味する。例20は鼻を覆って帝に見られないようにする意味を表す。

図書寮本『日本書紀』には、同時に用いられた「フタグ」「フサグ」の例が見られないが、「フタグ」と、「フサグ」の自動詞である「フサガル」の例が確認できる。次に図書寮本『日本書紀』における「フタグ」「フサガル」の意味用法を確認する。

21天皇天皇畏（給）て蔽（メラヲオホヒ）目（を）て不見（シ給）て却入殿（オホトノ）中に使（給）放於岳。

（図書寮本日本書紀巻一四永治二年点）

22預（アラ）知其謀（を）て密（シノヒ）に聚（ツトヘシラゲ）精兵数百（を）於（カキ）搅食（ミノ）の栗（クルス）林（て）為に仲皇子、将（ス）と拒（セキマツラ）太子。時太子、不知（シロ）兵の塞（フサ）カル事（ことを）而（て）出山（を）て行（こと）、数（アマタノ）里（サト）。

（図書寮本日本書紀巻一二永治二年点）

図書寮本の書写・加点年代は一一四二年と定かなものである。また、小林（一九七〇）は、図書寮本の巻により書写及び加点者を異

にするが、同じ時期に書写・加点されたものと見られ、ヲコト点・声点に朱墨があるが、全体を一つの訓点資料と見做し得ると指摘する。例21の「フタキ」は天皇が大蛇を恐れて、何かで目を覆うこと、例22の「フサカル」は道に兵がいっぱいになっており、通行ができないという意味を表しており、意味が異なっている。

以上、小川本（聖語蔵旧蔵）『四分律』、神田本『白氏文集』、図書寮本『日本書紀』における「フサグ（フサガル）」「フタグ」の例を確認した。「フサグ（フサガル）」は〈何かで穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉〈モノ・ヒトを食い止める〉の意に解されるのに対して、「フタグ」は〈あるものを何かで覆って遮る〉の意に解釈される。すなわち、同一の漢文訓読文の資料において、「フサグ」「フタグ」が用いられているが、意味用法が異なっていることが確認できた。

四　平安鎌倉時代の和漢混淆文の「フサグ」「フタグ」

本節では、平安鎌倉時代の和漢混淆文において、「フサグ」「フタグ」が平安時代の和文や漢文訓読文と比べ、どのような特徴があるかを確認する。なお、和漢混淆文にある漢字表記例「塞ぐ」は「フサグ」か「フタグ」かと読みが確定できないため、本稿では対象外とする。【表4】に示すように、「フサグ」「フタグ」の仮名書き例それぞれ19例、4例が見られる。

和漢混淆文の「フサグ」には、漢文訓読文に見られる〈モノ・ヒトを食い止める〉〈心をいっぱいにする〉の意に解される例は見られず、〈何かで穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉の意に解される例が見られる。これに加えて、平安時代の漢文訓読文に見られない〈あるものを何かで覆って遮る〉〈占める〉の意に解される例が見られる。

23いかにもする力なくて、弓矢の行く方も知らず、まづ顔をふさぎさわぎけるほどに…　（十訓抄・一ノ六蜂の恩返し）

24馬ハネテ乗タマラズ。足ヲ越テヲリタチヌ。伊豆国住人大見平次、返合テ佐ノ前ニフサゲタリ。又武者一騎馳来テ、大見ガ前ニ引ヘテ…　（延慶本平家物語・第二末）

25（義経）しかるを此三箇年が間、攻め落とさずして、おほくの国々をふさげらるゝ事…　（会）（高野本平家物語・逆櫓）

例23は蜂の群れの襲われることを前にして、「どうにもこうにもする力がなくて、矢弓などまったく忘れて、顔を何かで覆って遮って騒ぐばかりです」という意味である。例24は「大見平次は何度も繰り返して兵衛佐の逃げる道を遮った」という合戦の場面である。例25の「フサグ」は国土が占領されてしまうことを表す。平安時代

【表4】和漢混淆文における仮名書き「フサグ」「フタグ」

	フサグ							フタグ（フタガル）			
	道	国	人	口	目	顔	計	鼻	顔	穴	計
観智院本三宝絵							0			2(1)	2
今昔物語集							0				0
古本説話集							0		1		1
古今著聞集				1	1		2				0
打聞集							0	1			1
沙石集	1						1				0
十訓抄				1	1	1	3				0
金沢本仏教説話集							0				0
法華百座聞書抄					1		1				0
宇治拾遺物語					1		1				0
保元物語					2		2				0
平治物語							0				0
高野本平家物語	2	1			2		5				0
延慶本平家物語	1		1		2		4				0
土井本太平記							0				0
方丈記							0				0
計	4	1	1	2	10	1	19	1	1	2	4

の漢文訓読文における「フサグ」は〈あるものを何かで覆って遮る〉〈占める〉の用法がなかったが、和漢混淆文での「フタグ」の衰退とも関わって、この二用法を取り入れたと推測できよう。[6]

これに対し、「フタグ」は和漢混淆文では衰退する。平安和文、漢文訓読文において、合計31例見られた「フタグ」は和漢混淆文においては4例しか見られない。用法面も衰退し、この4例のなかで、〈占める〉の意に解釈される例は見られず、〈あるモノを何かで覆って遮る〉の意に解される例のみである。次のような例である。

26其夕ニナリテ、思イテ、オソロシカリケレハ、ネヤヲトチ、アナヲフタキテ、身ヲカタメテ、ウチニコモレリ。

（観智院三宝絵・中・一三置染郡臣鯛女）

そのゆふへになり…おそろしけれはねやをとちあなをふたきて身をかためてうちにこもれり。（関戸本三宝絵）

然到期日、閉屋塞穴、竪身居内。（日本霊異記・中・八）

27アナノクチクツレフタカル人ヲトロキヲソレテ穴ヨリキヲヒイツルニ九人ハワツカニイテ、一人ヲソク出ルホトニ穴ノクチクツレアヒヌ。（観智院三宝絵・中・十七美作国採鉄山人）

あなのつちくつれふたかりいれる人おとろきおそりてあなよりきほひいつるに九十九人はわつかにいて、一人おそらくいつるほとにあなのくちくつれおちぬ。（関戸本三宝絵）

時山穴口、忽然崩塞動。役夫驚恐、従穴競出、九人僅出、一人有後出、彼穴口塞合留。　（日本霊異記・下・一三）

28鳥獣ノダニ見ズ。嗅ノタヘガタケレバ、鼻ヲフタギテ、アヤシサニ強ヨリテミレバ、一人死人アリ。（打聞集・一七三行）

而ル間、麝香俄ニ出来ル、難堪キ事无限シ。鼻ヲ塞テ退クニ、此ノ香ノ奇特ナルヲ漸ク寄テ見レバ…　（今昔・六ノ六）

29大殿、直衣の袖を、顔にふたぎて泣き給ふ。

（古本説話集・下・七十）

例26では「ネヤをトヂ」に対応しており、アナを何かで覆って遮った意味に解される。出典の『日本霊異記』では「塞」を用いているが、例17などと同じく、『三宝絵』では文脈上適した訳語として「フタグ」を用いたのであろう。例27では、出典の『日本霊異記』では「塞」が用いられているが、「フタグ」の後続内容から考えると、人々が穴から次々と脱出できているため、完全に満たされ閉ざされた事を意味する「フサグ」より、土で一時的に遮られたと解し「フタグ」を用いたのではなかろうか。例28も鼻を手で覆って遮る（もしくは手で摘まむなどして息を止める）意味に解される。『打聞集』では「フタグ」とあるのでこの意味に適合するが、『今昔物語集』では「塞」で書くため、読みが確定できない。「塞」は『打聞集』と同じく「フタグ」と読まれる可能性もあるが、『今昔物語集』の「塞」がすべて「フサグ」と読まれると仮定すると、用法の拡大した「フサグ」で出典の「フタグ」を改変した可能性がある。例29も袖で顔を覆って泣く場面である。

右のように和文と同様〈あるものを何かで覆って遮る〉意味の例が少数見られるが、作品はいずれも和文的な要素を特徴としているものばかりである。『三宝絵』は和文の全盛期である平安中期に成立した作品で、『日本霊異記』をもとに和文的要素を交えて翻案して成立したとされる。『打聞集』『古本説話集』はいわゆる宇治大納言物語系統の説話集で、『今昔物語集』に比べて和文的傾向を示す作品である。

おわりに

本稿では、漢文訓読文、平安和文、和漢混淆文における「フサグ」「フタグ」の意味用法を分析し、次の三点を指摘した。

(1)平安時代の漢文訓読文では、「フサグ」「フタグ」は意味の差がありつつ、併存している。「フサグ」は〈何かで穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉〈モノ・ヒトを食い止める〉〈心をいっぱいにする〉の意、「フタグ」は〈あるものを何かで覆って遮る〉の意で用いられる。これに対して、和文では、「フサグ」の例

がなく、「フタグ」の例は〈あるものを何かで覆って遮る〉〈占める〉との二つの意で用いられる。

(2)同じ漢文訓読文の中で、「フサグ」「フタグ」が併用される例があるが、「フサグ」は〈何かで穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉〈モノ・ヒトを食い止める〉の意、「フタグ」は〈あるものを何かで覆って遮る〉の意に解され、意味用法の使い分けがされたことが確認できる。

(3)和漢混淆文では、「フサグ」は衰退しているが、前代の意味を踏襲しつつ、「フタグ」の〈あるものを何かで覆って遮る〉〈占める〉の意味をも担うようになり、意味の広がりが見られる。「ハナハダ―いと」など程度を表す語は、築島の指摘したとおり、漢文訓読文と和文との間に対立的に見られる同義異形態のものであるが、「フサグ」「フタグ」のように、資料の性格にこだわらず、意味用法が異なる両語がそれぞれ漢文訓読文、平安和文に多く用いられたのは文体差でなく、関の言うように意味用法の差と推測される。

【注】

① 「表現対象が一応同じである語」「略々同意味の語」「同じ意味の語」は築島（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会）三五〇頁、五四頁に見られる。

② 大川の研究に対して、山本（二〇一九）は「この方面で（筆者注：築島の二項対立語を測定指標にして、コーパスCHJを用いた文体研究で）の現階段での研究水準は大川孔明がその到達点を示している」と高く評価した。いっぽう、山本（二〇〇六）は、二形対立語とされる「シキリニ―しばしば」に意味の同義性が認められないことを指摘している。すなわち、大川が文体研究に用いた二形対立語のなかに同義性が認められない語も存在する懸念が残されている。

③ 築島「訓点語学研究史」、月本「訓点語学研究法」『訓点語辞典』（執筆項目）東京堂出版、二〇〇一年。

④ 築島（一九九二）（「平安時代の訓点資料に見える『和文特有語』について」『文化言語学―その提言と建設―』三省堂）は『白氏文集』『日本書紀』『大唐西域記』などに二形対立語としての和文語が現れる場合、古訓の和文的な性質であると述べたが、「フタグ」は『四分律』などにも見られることは、「フタグ」は訓読に用いられた語と考えられる。ただし、訓点資料の「フタグ」の例が少ない。また、例8～10に挙げたように、「フタグ」は「オホフ」と共に用いられるところから、「フタグ」は最初訓読に用いられたが、その後、類似語「オホフ」などに訓読の世界から淘汰されたと推測される。

⑤ 大坪によれば、聖語蔵本『願経四分律古点』、斯道文庫本『四分律』、小川本（聖語蔵旧蔵）『四分律』甲巻全巻、乙巻の一部はヲコト点がすべて春日の言う甲点であるという。また、大矢による聖語蔵本『願経四分律古点』のヲコト点図の誤りは春日が修正し、春日による斯道文庫本『四分律』のヲコト点図の誤りは大坪が修正しており、いずれも「タ」「サ」に関わる誤りの指摘が見られない。すなわち、小川本（聖語蔵旧蔵）・聖語蔵本『四分律』の「フタグ」「フサグ」が正しく解読されたであろう。

⑥　和漢混淆文で4例しか用いられていないことから、鎌倉期には「フタグ」という語が殆ど用いられなくなっていたと考えられる。

【参考文献】

春日政治（一九三六）「和漢の混淆」『国語・国文』六（一〇）

山田巌（一九四一）「今昔物語集に於ける和漢両文脈の混在について」『国語と国文学』一八（一〇）

堀田要治（一九四一）「『如シ』と『様ナリ』とから見た今昔物語集の文章」『国語と国文学』一八（一〇）

春日和男（一九五八）「大坪併治氏の『小川本願経四分律古点』」『国語学』三五

小林芳規（一九六七）『平安鎌倉時代における漢籍訓読国語史的研究』東京大学出版会

――――（一九七〇）「日本書紀における大江家の訓読について」『国学院雑誌』七一（一一）

峰岸明（一九八六）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

関一雄（一九九三）『平安時代和文語の研究』笠間書院

内田賢徳（二〇〇五）『上代日本語表現と訓詁』塙書房

山本真吾（二〇〇六）「平安時代に於ける『しきり（頻）』の意味用法について」『国語語彙史の研究』二五

――――（二〇一九）「『訓点特有語形』と和漢混交文」『文学・語学』二二六

大川孔明（二〇一七）「和漢の対立から見た平安鎌倉時代の文学作品の文体類型」『訓点語と訓点資料』一三九

【調査資料】

○電子テキスト：『日本語歴史コーパスＣＨＪ』：『竹取物語』『落窪物語』『枕草子』『源氏物語』『大鏡』『方丈記』『十訓抄』『宇治拾遺物語』／大正新脩大藏経テキストデータベース（SAT2018）：「東寺金剛蔵本頂瑜伽中略出念誦経巻第四康平八年」「東寺本大威力烏樞瑟摩明王経巻上康安二年」「東京大学国語研究室本大乗本生心地觀経巻第八治承四年」「法隆寺本南海寄歸内法伝四巻大治三年」「天理図書館本三教指歸久寿二年」「松田福一郎本四分律行事鈔巻上平安初期」「国立国会図書館法隆寺本三蔵法師伝巻七天治三年」「東大国語研究室本大毘盧遮那成佛経疏巻九永久二年」「興福寺本高僧伝巻第十三康和二年」「正智院本仏頂尊勝陀羅尼経院政期」○刊行本文、索引、影印本等（編者名・著者名は省く）：『浜松中納言物語総索引』『栄花物語本文と索引』『法華百座聞書抄総索引』『平治物語総索引』『保元物語総索引』武蔵野書院／『宇津保物語本文と索引』『今昔物語集文節索引』『三宝絵詞自立語索引』『古今著聞集総索引』笠間書院／『土井本太平記：本文及び語彙索引』『冥報記の研究　巻一・二』勉誠出版／『古本説話集総索引』『訓点資料の研究』『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』風間書房／『最明寺本往生要集』『仏教説話集の研究：金沢文庫本』『古典研究会叢書五行大義』『訓点語彙集成』汲古書院／『打聞集の研究と総索引』清文堂／『三教指歸注集の研究』大谷大学／『医心方の研究：半井家本医心方附録』オリエント出版社／『高山寺古訓点資料第一・二・四』『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究　訳文篇』東京大学出版会／『延慶本平家物語本文と索引』『平家物語「高野本」語彙用例総索引』『神田本白氏文集の研究』『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』『仮名遣及仮名字体沿革史料』『大般若経音義の研究　本文篇・索引篇』『慶長十年古活字本沙石集総索引』勉誠社／『「法華文句」古点の国語学的研究：東大寺図書館藏本』桜楓社／『天理図書館善本叢書和書之部第五十七巻平安詩文

残篇』天理大学出版部／『古点本の国語学的研究　訳文篇』講談社／『図書寮本日本書紀　本文篇・索引篇・研究篇』美季出版社／『願経四分律古点』啓明会／『文鏡祕府論』古典保存会／「小川本願経四分律古点」「興聖寺本大唐西域記巻十二の朱点」『訓点語と訓点料』別刊第一、一一／大坪併治氏の「小川本願経四分律古点」『国語学』三五／「前田本日本書紀院政期点　本文篇」『北海道大学文学部紀要』二五（二）／「醍醐寺宝蔵大唐西域記建保点巻第十二」『醍醐寺文化財研究所紀要』一二

〔付記〕　本稿は、第一二四回訓点語学会研究発表会（二〇二一年五月二十三日、オンライン開催）の口頭発表に基づき、加筆修正を加えたものである。会場内外でご意見を賜った方々に御礼申し上げます。